



1097

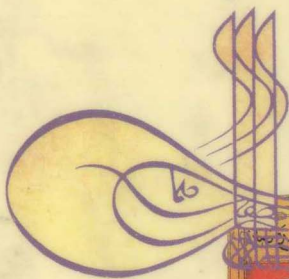
講談社現代新書

オスマン帝国

西欧人の見た「残虐な征服者」は、西欧をはるかにこえる先進国だった。羊飼いで大臣になれる開放的な社会。キリスト教世界で迫害されたユダヤ難民を受け入れた宗教的寛容性。多民族・多宗教の超

鈴木 董

大国を支えた「柔らかな専制」の秘密に迫る。



イスラム世界の「柔らかな専制」

オスマン帝国——イスラム世界の「柔らかな専制」

一九九二年四月二〇日第一刷発行

著者——鈴木董 ©Tadashi Suzuki 1992



発行者——野間佐和子 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二二—二 郵便番号 一一二—〇一

電話（編集部）〇三—五五九—三五二 （販売部）〇三—五五九—三六二 （製作部）〇三—五五九—三六五

装幀者——杉浦康平＋佐藤篤司

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

ISBN4-06-149097-4 Printed in Japan（定価はカバーに表示してあります）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、学芸図書第一出版部あてにお願いいたします。



オスマン帝国

イスラム世界の「末れかい専制」

鈴木 董

講談社現代新書

序「トルコの脅威」の虚像

三つの名前を持つ帝都……歪められたオスマン帝国像……「トルコは世界の目前の脅威」
 ……芸術を愛し、花を愛でる人々……ユダヤ難民を保護した寛容性……超大国を支えたゆるやかな統合……先進的な「柔らかな専制」

9

1 戦士集団から国家へ

25

トルコ人はどこから来たか……ムスリム・トルコ系王朝の誕生……トルコ化するアナトリア……フロンティアの戦士たち……伝説の始祖オスマン・ベイ……二代オルハンの西北アナトリア征服……イスラム法の特長……イスラム法官制度の導入……宰相制度の創設……

ひげなしミハルの活躍……オルハンの常備軍構想……ムラト一世のバルカン進出……宰相
チャンドルルの家……奴隸軍人制度の採用……真の「君主」へ……電光バヤズイット、十
字軍を撃破……ベイからスルタンへ……アンカラの敗北……失地回復の半世紀

2—コンスタンティノープルの攻防………

57

三度目の即位……兄弟殺しの法令……最初の対立……ウルバンの巨砲……一〇万をこえる
オスマン軍……大城壁と海……ジェノヴァ人の中立……七〇〇〇人対一〇万人……二度目
の対立……大略奪の三日間……イスタンブルの伝説……専制君主への道

3—イスラムⅡ共存の知恵………

77

エザーンの流れる街……モスクを中心とした街づくり……公共事業を支えたワクフ制度……
繁栄するバザール……トプカプ宮殿の建設……ムスリムと非ムスリムの混在……「ミレツ

ト制」は存在したか……寛容な「聖戦」……寛容なるズインミー制度……民族より宗教……ムスリムの民族モザイク……「ローマ人」としてのギリシア人……多宗教社会の秘密……上も下も多言語社会

4—イスラム的世界帝国への道………

バルカン全土の征服……好敵手カラマン君侯国の征服……白羊朝との抗争……三つの遠隔交易路……黒海が「オスマンの海」に……招かれたルネサンス画家……イタリア征服の夢……王子の皇位争い……ローマのオスマン王子……イスラム法にしばられた帝国……邪悪なほどの美少年……スンナ派とシーア派……「冷酷者」セリム一世……シーア派大肅清……チャルデイルンの戦い……イスラム世界の成立……多極化するイスラム世界……シリアの攻略……マムルーク朝の滅亡……最後のイスラム的世界帝国……スルタンⅡカリフ制の伝説

5—「壮麗者」スレイマンの光輝………

6 「組織の帝国」の伝説

肩目秀麗の青年スルタン……「赤いりんごの国」への聖戦……ロードス島の海賊……エジプト支配の確立……ハプスブルクとの遭遇……ウィーン包囲の衝撃……諸王の王スルタン……「立法者」の組織……スルタン専制の秘密……二人の寵妃……紅帽の徒の反乱……赤ひげバルバロッサ……地中海は「スレイマンの海」……インドへの道……後継者をめぐる暗闘……スレイマニエ・モスクの光輝……オスマン史の頂点

西欧人の恐れた「組織の帝国」……ハンとシャー……スルタンを制約するもの……スルタンの絶対的代理人……大宰相と宰相の争い……「御前会議」と「四つの柱」……「御前会議」の意味……組織内コミュニケーションの中枢……文書行政のシンボル……西欧人が憧れたオスマン財政……貨幣の威光……租税の仕組と財政組織……公正で迅速な裁判のシステム……イスラム法学者のヒエラルキー……スルタンを廃した「イスラムの長老」……果と州のシステム……脅威の常備軍団

7 人材吸収・養成のシステム

203

羊飼いの大臣に……アスケリとレアヤー……開放社会か閉鎖社会か……メクテプとメドレセ……「開かれたメドレセ」の実状……二人のサクセス・ストーリー……幸運とコネさえあれば……奇妙なデウシルメ……少年徴収の実態……イエニチエリの昇進……もつとも華やかな出世街道……「内の少年たち」の出世レース……小姓出身の軍人宰相……小姓出身の文人宰相……大官の「家」……非公式のインテリサーブ……オスマン社会に世襲はあったか

8 超大国の曲り角

235

オスマン艦隊、完敗す……曲り角に立った超大国……魚は頭から齧る？……復古をめざす改革案……オスマン社会の構造的変化……「軍人の帝国」から「官僚の帝国」へ……書記から大宰相に……イスラム社会での技術的優位……技術格差としての「西洋の衝撃」……「柔らかな専制」の終焉

私のトルコ史研究の恩師
護雅夫先生に捧ぐ

序「トルコの脅威」の虚像



西欧人の描いた侵略者トルコ人、一六世紀初頭

三つの名前を持つ帝都

西方の人々が古くからアジアとヨーロッパを分かつと考へてきたボスポラス海峡、そのほとりに位置するイスタンブル。黒髪だけでなく褐色の髪や金髪の人々が行きかい、ところどころに石造の大建設物がそびえる街頭に立つ時、東方から来た旅人は、そこに西方的なものを感じるであろう。

一方、モスクの大ドームと尖塔がそびえ、色とりどりの品物のならぶバザールがにぎわう風景を目にする時、西方からの旅人は、東方的な雰囲気に魅せられるであろう。

この街は、遠く中国やインドからの豊かな物産が、陸と海の「シルクロード」を通じてはるばるとローマ帝国に運ばれていた頃から、すでに一大物資集散地の役割を果たしていた。ユーラシア大陸の東西交通の一大ターミナルであったこの古来の国際都市は、その二千数百年におよぶ歴史のなかで、三つの名前を持った。

まず紀元前七世紀頃、古代ギリシア人によって建設された時に、ビザンチウムの名を与えられている。その後、コンスタンティヌス大帝によってローマ帝国の首都とされた後に、コンスタンティノープルの名を得た。そして、イスラム教徒であるトルコ人が建設したオスマン帝国がこの街を征服した後には、イスタンブルという名前で呼ばれることが多くなっていた。

三つの名前で広く知られるこの街は、旧大陸における地政治学的重要性のゆえに、「コンスタンティノープルを制する者は世界を制する」とまでいわれる戦略的要点だった。実際、この街は、ローマ帝国、ビザンツ帝国、そしてオスマン帝国という、世界史上類例の少ない三つの大帝国の帝都となった過去を持つ。

イスタンブル旧市街にそびえる雄大なアヤソフィアの姿を目にした旅人は、ビザンツ帝国の栄光に思いをよせるだろう。トプカプ宮殿に陳列された、巨大なエメラルドがちりばめられた短刀や、無数のエメラルドの輝く黄金の玉座を見る時、つい数十年前までこの街の主であつたオスマン帝国の栄華に目を見はるにちがいない。

歪められたオスマン帝国像

ところが、ローマやビザンツの繁栄について語られることは多くても、オスマン帝国について語られることは、我が国ではほとんどない。我々日本人が西欧中心史観になれ親しみすぎているため、イスラム世界に成立したこの帝国が六百数十年にわたって生き続けた超大国であつたことすら、忘れられているのである。

そればかりではない。この帝国についての、我が国ではなほだ乏しい知識の中では、東洋的な専制の国、トルコの脅威の源泉、コンスタンティノープルの破壊者といった暗い

イメージが浸透している。さもないければハーレムの秘められた世界といった、興味本位の官能的なイメージでとらえられがちである。ところがこのようなイメージは、実はほとんどが、西欧人がかつて創り出したイメージの受け売りにすぎないのである。実態は、それとは大きくかけ離れている。

確かにオスマン帝国は、中世から近代へと移行しようとする時期の西欧にとっては、つねに最大の問題であり、もつとも恐るべき脅威であった。

一四五三年は「西洋史」の世界で、しばしば「中世」と「近代」の分岐点とされる。この年にビザンツ帝国の都コンスタンティノープルがオスマン帝国によって征服された時、西欧の人々は衝撃にさらされた。悲報を告げる教会の鐘の音は、西欧キリスト教世界の街々に響きわたり、人々は東方からの「異教徒」の脅威におののいた。

西欧キリスト教世界は、当時、ようやく一五世紀ルネサンスの開花を迎え、新たな発展への芽をはぐくみつつあった。しかし、とはいっても当時の西欧は依然として、ユーラシア大陸の極西の辺境に位置する後進地域にすぎなかった。

キリスト教世界の先進国であるビザンツ帝国は、なお、当時の西欧にとっては文明の灯であったのである。手づかみでなく、フォークとナイフで食事をするといった日常生活の作法さえ、彼らはビザンツ帝国から学んでいた。ローマ帝国の遺産と東西交易の富に支え

られて築きあげられた、ビザンツ帝国の文化と文明は、当時の西欧の畏敬の対象だった。しかも、もはや衰えていたとはいえビザンツ帝国は、七世紀以上にわたって、東方からのイスラム教徒の侵入に対する防波堤としての役割を、西欧キリスト教世界に対して果たしてきていた。その防波堤の喪失、そして栄光と伝説に彩られた巨大都市の喪失が、当時の西欧人にとって一つの悪夢となったのはこのためであった。

「トルコは世界の目前の脅威」

一六世紀に入り、すでに「近代」の胎動しはじめた西欧にとってさえ、オスマン帝国はなお外からの最大の脅威であった。

一六世紀初頭、宗教改革の嵐が西欧キリスト教世界に吹きすさぶうとしていた時、教会とキリスト者の腐敗を非難してやまなかったルターにとって、「トルコ人」は、まさにこの腐敗墮落した世界に神がつかわした神罰にはかならなかった。この「神罰たるトルコ人」は、いくばくもなく、まさにルターらの宗教改革に対する抑圧者、神聖ローマ皇帝カール五世の根拠地ウィーンの包囲を敢行し、西欧世界を衝撃でつつんだ。

当時、オスマン帝国の現実的脅威からは遠く離れていた英国の、冷静な哲学者フランシス・ベーコンすら、「トルコ人は、世界の目前の脅威」と見た。それほどであったから、現

実にオスマンの脅威にさらされつつあった地方では、その恐怖は相当大きなものであった。当時、南ドイツでは、むずかる子供たちに「トルコ人が来るぞ」と脅せば泣きやんだと伝えられるほどである。

それを考えると、異教徒の征服者であるオスマン帝国について、当時の西欧の一般の人々が偏ったイメージを持ったのは当然のことであった。「戦争」「征服」「略奪」といったイメージに彩られた「トルコの脅威」観は、こうしてできあがっていった。

しかも、このような歪んだイメージに、その後の東西関係の逆転とともに生じた西欧中心主義が結びついて、「東洋的専制の国」「文化なき征服者」「苛酷な抑圧者」といったイメージを、さらに生み出していったことも想像に難くない。

芸術を愛し、花を愛でる人々

それでは、彼らは本当に苛酷な抑圧者であったのだろうか。

かつてオスマン帝国の領土であった諸地域を訪れる者は、いたるところに、オスマン帝国時代に建設された公共施設を見いだすだろう。エジプトのカイロの旧市街のそこそこには、美しい石彫で飾られた人工の泉が見られる。それらの多くは、オスマン朝の支配者たちによって作られたものである。水に乏しい中東の都市に住む人々にとって、飲料水を与

えてくれる泉はもつとも嬉しい贈り物である。

泉のほかにも、カイロや、シリアのダマスクスや、ユーゴスラヴィアのサラエヴォなどには、オスマン朝の人々によって作られ、今も活発な商業活動に用いられている、多くのバザールやキャヴァン・サライが見られる。

これらの公共施設は、決して一部の特権者のためのものではなく、街々のごく普通の庶民の生活にも役立つものとして建設されている。単なる抑圧者がはたして、おびただしい公共施設を建設することで、異郷の異民族の人々の生活をも潤すであろうか。

文化なき征服者というイメージも、オスマン文化の現実にあふれると揺らいでくる。イスタンブルに今も残る歴代君主の居城、トプカプ宮殿を訪れる人は、絢爛豪華な宝飾細工や、繊細な文様が織り込まれた美しい絹の衣装に目を奪われるだろう。高価な写本を飾る、多彩で精緻なミニアチュール（細密画）もまた、我々の目を楽しませるだろう。

優雅で壮麗なスレイマニエ・モスクも、ブルー・モスクの内壁を飾る色とりどりの花模様、装飾タイルも、オスマン帝国の文化の所産なのである。

オスマン帝国の人々は、決して武力一本やりの単なる征服者などではなく、芸術を愛し、詩を好み、花を愛でる心を持った人々だった。実際、一八世紀初頭のオスマン帝国では、「チューリップ時代（ラーレ・デヴリ）」という、華やかな文化の時代さえ花開いた。人々は、